

宗教間対話を目指す現代の神学におけるキリスト論の問題点 ーイエス・キリストの神性と人性の区別と統一ー

金 珍熙

1. はじめに

ハンス・キュング (Hans Küng, 1928～) は1994年に発表した著作 *Das Christentum* (Piper Verlag, München, 1994) において次のように言う。

「宗教間の平和なしに国家間の平和はない。宗教間の対話なしに宗教間の平和はない。宗教に関する根本的な探求なしに、宗教間の対話はない⁽¹⁾」。

この言葉に表れているように、彼は、宗教に関する根本的な探求が宗教間の対話をもたらし、その対話が平和を生み出すと考えた。その考えのもとに、彼はキリスト教の本質を問い、歴史的検証を精力的に行っていく。このようなキュングの姿勢は、1960年代以後における宗教間の対話を目指す神学の一つの断面をよく表すものである。

キュングによれば、歴史におけるキリスト教の様々な形態にも拘わらず、その根底には本質的な要素があると言う。それがすなわち、イエス・キリストである⁽²⁾。ここまでは当然の主張であるかのように思われるが、彼の本格的な主張はそこから始まる。すなわち、キリスト教の核心をなすものとは、何かの原理ではなく、生きていた人間である⁽³⁾。人間イエスの生涯こそがキリスト教の中心的な事柄であり、この意味でキリスト教は徹底的なヒューマニズムに他ならない、と彼は主張

する。⁽⁴⁾そして、人間イエスが示す行動の規範に注目し、そこから世界の宗教における普遍的な倫理を主張するのである。⁽⁵⁾

このようなキュングの主張からは、本質と形態という二つの対極をなす概念的な構造と、人間中心主義という特徴が読み取れるが、これは彼だけではなく、1960年代以後に形成されてきた現代のキリスト論、とりわけ、宗教間の対話を目指す現代の神学的流れにおいてよく見られる傾向である。⁽⁶⁾それらの主張は、様々な議論を呼び起こしてきたが、世界が直面している宗教間の対立をはじめとする様々な問題に応答するものとして、今日では大きな影響を与えつつある。

それらの議論は、哲学的なものから歴史、政治、倫理にいたるまで多岐にわたるが、その根底にはイエスという一人の人物が存在しており、その人物像に基づく一定のキリスト論が想定されている。その議論が想定しているキリスト論とは、いったいどのようなものであろうか。また、それはいかなる神学的な意義と課題をもっているのであろうか。本稿では、現代のキリスト論、とりわけ宗教間の対話を目指す議論が想定するキリスト論に焦点を当てて、その特徴と問題点を明らかにしてみたい。

2. 宗教間対話を目指す神学におけるキリスト論の問題点

ここで宗教間対話を目指す神学が想定するキリスト論という観点から、再びキュングに注目してみよう。キュングは、キリスト教が形成してきたイエスについての理解を一つずつ究明しながら、その先にある原型としての一人の人間を見いだそうとする。キュングは、とりわけ、キリスト教において述べられてきたイエスにおける神性と人性という二つの本性に対して、また、三位一体論に対して大きな疑問を提示する。すなわち、「どうして＜二＝一＞が可能であるか？さらに、三位一体において＜三＝一＞という＜秘密＞はどう理解できるのだろうか？」⁽⁷⁾と反問する。そして、それらの記述は真理ではなく、一つの政治的な妥協であり、キリスト教の本質的なものではないと主張する。⁽⁸⁾また、宗教多元主義を標榜し、現代神学の急進的陣営の先鋒に立ってきたジョン・ヒック（John Hick, 1922～2012）にも、同じ主張を見いだすことができる。ヒックは、イエスの神性に対する理解が、人間イエスに飾られてきた装飾であると理解する。そのため、それら

の記述を文字通りの事実としてではなく、宗教的隠喩として理解すべきであると言う。⁽⁹⁾

それでは、キュングやヒックに代表される議論が共通して追求している人間イエスとはいかなる存在であろうか。二人の記述が描いているイエス像に注目するならば、それが驚くほどに素朴なものにとどまっていることに気づく。それを簡単にまとめるならば、預言者的な人物であり、高い道徳的な価値を述べた人物であること、その意味でイエスは私たちの模範になる霊的な指導者であった、ということである。⁽¹⁰⁾ここで分かるように、着せられてきた服を脱がせて、見いだした裸のイエスは、極めて抽象的で乏しい人物像になっている。これは資料の限界、また歴史的な研究の限界もあると思われるが、その議論が意図的に追求した一つの結果である。ここで、歴史においてキリスト教が形成してきた救済者や仲保者としての存在といった豊かなイエス・キリスト理解が、一人の人間であるイエスに限定され、乏しくなってしまうという問題があげられる。ではなぜ、イエスの多様な意味と役割を着せられた服として理解し、人間としてのイエスのイメージを追求するのであるのか。上記のキュングやヒックの例で確認したように、宗教間の対話を目指す神学において、伝統的なキリスト教が告白してきたイエスにおける神性は「政治的な妥協の産物」、ないし、「宗教的な言葉」として理解される。そしてキリスト教は、宗教的ないし隠喩的表現を文字通り受け止めることによって、排他性を生み出した。さらに、そのことがキリスト教史において弊害をもたらし、宗教間の対立の危機を高めているという認識につながる。⁽¹¹⁾したがって、キリスト教の排他性や宗教間の対立の危機という問題は、人間イエスというキリスト教の原型を追求することによって、克服できるとの主張である。

これらの主張は、ある意味、間違っていない。なぜなら、キリスト教における信条形成の経緯には、政治的な妥協の産物である側面が存在しているからである。また、イエスそのものと、キリスト教史において形成されたイエスについての解釈は、あくまでも同一のものではないからである。しかしながら、まさにこの理解に基づけばこそ、一つの根本的な疑問が湧いてくる。その疑問とは、イエスについての解釈、とりわけ彼の神性に対する記述という宗教的・隠喩的表現の意義が何であるのか、ということである。それは、キュングやヒックが主張するように、キリスト教の弊害をもたらすような、客観的な事実に対立するものとし

て、私たちが克服すべき課題であろうか。彼らの主張においては、イエスに装飾されたものとイエスそのものを切り離し、意図的に、素朴な人間イエスを見出そうとするが、それは単に飾りだけなのだろうか。また、そこには何かの積極的な意義は存在しないのだろうか。

かつて『キリスト最後のころみ』で有名な小説家ニコス・カザンザキス(Nikos Kazantzakis, 1883~1957)は、自分が描く物語が事実ではなく、真実であると言った。⁽¹²⁾すなわち、自分の小説が歴史的な事実ではないが、それはむしろ物事の真実そのものを表しているということである。このことは、少なくとも文学においては、客観的な事実であるかどうかという一般的な理解とは異なる世界が存在することを言い表している。この理解をイエスについての理解に適用すると、一人の人間であったイエスに対する宗教的な告白と記述が客観的な事実として理解されないにしても、異なる次元において真実そのものをより明らかに表している、ということになる。

聖書が歴史的な事実を記録した歴史書ではなく、神とイエス、人間をめぐる「信仰的な物語」であることを私たちが認めるならば、イエスの神性に対する聖書の記述、また、それに基づいてキリスト教が歴史において形成してきたイエスに対する多様な理解を、単に宗教的な装飾表現として片付けることはできない。カザンザキスの例で分かるように、イエスの神性についての理解の中には、イエスの真実が含まれているからである。すると、イエスの神性と人性を切り離し、そこから一人の人間の存在を見出そうとする試みは、キリスト論の貧弱化を招くだけではなく、イエスの真実そのものからも離れることになるのである。

このことは、宗教間の対話を目指す神学がはらんでいる重要な問題を浮き彫りにしている。それは、イエスの神性に対する理解の中には、イエスの真実が含まれているにも拘わらず、宗教間の対話という目的のために、それが取り除かれてしまうという問題である。その結果、イエス・キリストにおける神性と人性の間の断絶だけが強調され、統一は軽視されてしまう。また、イエスはあくまでも私たちと変わらない一人の人間として理解され、人間の一般の模範的なあり方として提示されるものの、彼と私たちの区別は解明されていないのである。

以上の検討は、本稿が向かうべき次の課題を浮き彫りにする。その一つは、イエス・キリストの神性と人性はいかなる区別と統一の関係にあるか、もう一つは、

そのようなイエス・キリストと私たち人間一般は、いかなる区別と統一の関係にあるか、ということである。神学の意義の一つが、神とイエスそして私たちにある関係の区別と統一を究明することにあるという点を考えるならば、これは極めて重要な課題である。そこで本稿では、イエスの神性と人性の関係を理解するために、とりわけ絶対と相対の関係そのものから考察を進めていきたい。

3. 絶対と相対との区別と統一

私たちが絶対と相対との関係そのものに注目するならば、その関係についての考え方が宗教一般において広く存在してきたことに気づく。それは、例えば私たちに知られている「道可道非常道、名可名非常名」（真理〔道〕と言える真理は常なる真理にあらず、真理と名づけられる真理は常にその名にあらず）という道徳経のはじめの言葉によく表れている⁽¹³⁾。そこには、真理そのものである絶対性と、その真理が現れ名付けられたものである相対性との区別と統一が述べられている。

この区別と統一こそが問題であるが、その理解を整理するならば次の通りである。まず、統一は真理そのものに起因するということである。例えば、真理がなければ、その真理の現れは成立しない。また、その現れがなければ、それに対する認識も成立しない。この点において、真理は常に、その現れとそれに対する認識の根拠として存在し働く。すなわち、絶対の存在と働きが終わって、そこから別に相対が存在し現れるのではなく、絶対は相対の根底として背後に存在し、活動し続けている、ということである。この絶対の存在とその働きこそが、真理と真理の現われ、それに対する認識における統一をもたらすのである。

次に、区別は存在の性質の差に起因するということである。真理そのものと、その真理がある形に限定され現れたものとの間には、存在的・概念的・時間的な差異がある。それは例えば、先の存在は後のものの根底にはなり得るが、その逆はできないということにおいて明らかな事実である。この先なるものの優位性は、よく無限、あるいは何にも縛られない自由として表現される。このような存在の性質の差異から、絶対とそれを現す相対との間には、必ず区別が生じるのである。

このような真理そのものと真理の表れ、それを認識する背景に存在し働く真理との統一と、真理と真理によって引き起こされるものとの間における区別は、上

記の道德經だけではなく、様々な宗教において認識されてきた。例えば、それは儒教において目に見えない真理の理とその現れとの関係を述べる理気論として、また仏教における絶対無という真理と相対的なものの現れの間を色即是空という考え方にも通じている。また、聖書においても、神殿に縛られず偏在する神として、また、思うがままに吹く神の霊の自由として、善き存在は神だけであるというイエスの言葉において上述の区別と統一の関係を確認することができる。⁽¹⁵⁾

このような絶対と相対の関係を神学の分野において究明したものとして注目に値するのが、滝沢克己（1909～1984）である。滝沢は、絶対が自己を限定し、相対に触れるその接点がすべての始まりであり、絶対的な基点であるとし、その基点における絶対と相対の区別と統一を「不可分・不可同・不可逆」という概念で整理した。⁽¹⁶⁾すなわち、絶対が自己を限定し、相対と触れ合うその接点こそが、すべての基準であり、その基準における絶対と相対の関係が、離れず、混同されず、逆にすることのできない秩序をもっているということである。その三つの不可の関係によって結ばれている神と人との結合を、彼は「インマヌエル」として主張しており、そのインマヌエルこそが存在的な意味においても、活動的な意味においてもイエス・キリストに他ならないと主張した。⁽¹⁷⁾

このような絶対と相対の関係性からイエス・キリストの神性と人性の問題に注目するならば、宗教間の対話を目指す現代のキリスト論のように、絶対的な神と一人の人間としての相対的なイエスを切り離すだけでは、その関係性が究明されないことは明かである。イエス・キリストには、神性と人性の間における断絶ではなく、神そのものと神の自己限定としての顕現と、それによって引き起こされる私たちの認識の間における区別と統一が存在するのである。

このように、イエスの神性についての記述が単に人間イエスに着せられた装飾ではなく、そこにはイエスの真実が含まれており、イエスの神性と人性の間には区別と統一が存在する。そうであるならば、イエスの神性と人性の断絶を試み、人間イエスだけに注目する試みは重大な問題を抱えていると言えよう。それではこの問題を乗り越えるためには、イエスの神性と人性の関係をいかに理解すべきであろうか。人間イエス、あるいは、神イエスという一方の理解ではなく、まことの神・まことの神であるイエス・キリストというカルケドン公会議以後の謎めいた理解をいかに受け止めれば良いのであろうか。この問題を考えるために、宗

教間の対話を目指す神学が看過してきた、イエス・キリストの神性と人性の関係、また、イエス・キリストと私たち人間一般との区別に注目する必要がある。

4. イエス・キリストの存在の意義と役割

ここで、絶対と相対との区別と統一の関係を究明した滝沢に再び注目しよう。上記のように、滝沢は、絶対の自己限定という、絶対と相対が触れ合うその一点こそがすべての始まりであり、基準点であると理解した。⁽¹⁸⁾彼は、その主張にとどまらず、もう一步先に進み、今度はその一点こそがイエス・キリストであると主張する。⁽¹⁹⁾すなわち彼は、神としてイエスを信仰の対象にすることなく、あるいは、人の模範的な例として理解するのでもなく、イエス・キリストを通じて人間の存在そのもののあり方を見つめるのである。

このようなイエス・キリストに対する滝沢の解釈は、これまで多くの誤解を招いてきた。それは伝統的な理解からも、現代のキリスト論の理解からも逸脱していたからである。⁽²⁰⁾しかし、先述のカザンザキスの例で分かるように、事柄の奥に存在する真実を捉えるという視点からすれば、滝沢はイエス・キリストを通じて存在そのものの根拠を見ていたと理解することができる。彼によれば、神が人間に接する自己限定の仕方はキリストである第二格の神として行い、それが歴史において示されたのがイエス・キリストである。⁽²¹⁾すなわち、イエス・キリストは、神性において存在一般に触れ合い、人性において人なる姿を通じてその事実を示した存在であった、ということである。この神性と人性の関係が、上述した不可分・不可同・不可逆という三つの不可の関係である。言い換えれば、主語と述語の関係のようにイエスは彼の本性であるキリストに徹底して従い、神と人とは区別と統一をもって一つになっている「インマヌエル」という事実を私たちに示した、ということである。

ここで、イエス・キリストの存在の意義と役割に関する一つの理解が得られる。すなわち、イエス・キリストは存在一般を受け止め、共にいる方であると同時に、歴史においてその事実を具体的に「示す存在」であったということである。彼は示す存在であり、私たちは示される存在である。また、彼は判断の基準になる存在であり、私たちはその基準によって計られる存在である。つまり、イエス・キ

リストは示すという目的のために立てられた、一つの基準であったということである。⁽²²⁾

この示す存在という理解に立てば、イエス・キリストの特性と私たちとの区別が明らかになる。キリストは第二格の神として私たちを受け止め、共にいてくださる。それと同時にその事実をイエスという存在を通して限りなく示した。そして、イエスと呼ばれたキリストは、今私たちの足元で私たちを受け止めてくださっている。⁽²³⁾ このようなイエス・キリストと私たちの間の最も大きな区別は「非本来性」(罪)の不在である。ここで言う非本来性とは、神により作られたものとして、神によって定められた存在のあり方に逆らう存在の仕方である。私たち人間は神によって造られ招かれている存在であるにもかかわらず、それに反する生き方をする。これは聖書において罪として表現されたものである。一方、聖書によって表されているイエス・キリストは、そのような非本来性をもたない存在であった。彼は肉としては私たちと変わらない存在であったけれども、神に逆らうという非本来性をもっていなかった。もし、彼がキリストである以外に非本来的なあり方の可能性をもっていたならば、そして実際にそのように生きていたならば、彼は宗教的な天才や英雄になったとしても、キリストとしての基準にはなり得なかったと考えられる。このことは、キリスト教においてイエス・キリストにおける神性と人性の統一として理解されてきた。

しかし、ここで言うイエス・キリストにおける神性と人性の統一とは、歴史において現れたイエスが、すなわち神そのものとしての姿であり、その意味で基準であったという意味ではない。イエスは、あくまでも歴史における相対的な現れにすぎない。私たちがその現れが、すなわち神の顕現であったと理解してしまうならば、彼がユダヤ人であったこと、男性であったこと、彼が使った当時の言語が、神の言葉の一部として提示されたということになってしまうからである。⁽²⁴⁾ このようなイエス・キリストにおける神性と人性の統一についての誤解が、本稿の最初に言及した宗教間の対話を目指す神学が主張するキリスト教の歴史における弊害につながることは、言うまでもない。

ここで述べるイエス・キリストにおける神性と人性の統一は、歴史上に表れた彼の姿が示す内容に関するものである。それはあたかも、聖書が歴史的な書物でありながらも、その内容は歴史を超えた普遍的なものであると同じ関係である。⁽²⁵⁾

すなわち、歴史におけるイエスは時空によって限られた存在であったけれども、彼の生涯とメッセージの内容は、歴史に縛られるものではない。このことは前節において、真理そのものと真理の表れの統一と区別として確認したとおりである。イエス・キリストにおける神性と人性の関係にも同じく統一と区別が存在しており、統一、あるいは、区別だけではその関係を理解することはできない。

以上のような、イエス・キリストの存在と役割を理解するとき、宗教間の対話を目指す神学が看過してきたイエス・キリストにおける神性と人性の統一を理解することができる。また、イエス・キリストと私たちの区別も理解することができる。このような理解に基づく限り、神性を除いた人間イエスだけを主張すること、また、彼を単なる人間の模範として理解する試みは適切ではないと言えよう。神とイエス・キリスト、私たちの間には区別と統一が存在しており、その区別と統一の関係においてのみ、それぞれは正しく理解されるのである。

5. 結びにかえて

本稿は、宗教間の対話を目指す現代の神学におけるキリスト論の問題を明らかにしてきた。また、イエス・キリストは、彼の神性と人性の区別と統一の関係の中で理解される必要があることも指摘した。さらに、イエス・キリストは絶対と相対の間に立って活動しながら示す、神と人との間の基準であるイエス・キリストの存在の意義と役割も明らかにしたのである。これらの理解は、結果的に一つの疑問を投げかける。それは、宗教間の対話を目指す現代の神学が意図するように、イエス・キリストの神性を相対化させ、一人の人間イエスを追求することが、宗教間の対話に必ず必要であるか、という疑問である。しかし、宗教間の対話の有効性を問うことは、本稿の射程を超えるものであるため、ここでその答えを見出すことはできない。

ただ、本稿で取り上げた滝沢を見る限り、それが必ず必要であるとは言い切れないであろう。なぜなら、彼はカルケドンにおける両性論の伝統を引き継ぎながらも、周知のとおり、キリスト教と仏教との対話に大きく貢献したからである。このことは、キリスト論に対する豊かな解釈が、逆説的に宗教間の対話を促進させることもある、という事実を示唆する。つまり、少なくともイエス・キリスト

に対する単性論的な理解が、宗教間の対話の絶対条件ではないということである。

イエス・キリストに対する単性論的な理解が絶対的な条件でないならば、本稿で検討したように、イエス・キリストの意義と役割をめぐる、キリスト論の貧弱化や、絶対と相対との分離に導くような単性論的理解に固執する必要はない。むしろ、これからはイエス・キリストに関する豊かな理解を保持するとともに、それをいかに望ましい宗教間の対話に導き、現代の問題に応答できるか、新たな道を切り開く神学形成が求められているのではなかろうか。

付記

本稿は、2013年9月10～11日に西南学院大学で開催された日本基督教学会第61回学術大会における研究発表、「イエス・キリストにおける神性と人性の関係から見る現代キリスト論の問題点」に加筆・修正したものである。

注

- (1) Hans Küng, *Das Christentum*, Piper Verlag, München, 1994, S. 1.
- (2) Ibid., SS. 41-44.
- (3) Ibid., S. 51.
- (4) Ibid., SS. 65-67.
- (5) Ibid., SS. 77-79 ; SS. 890-891.
- (6) それらの議論は多くの人物によってなされている。ジョン・ヒックの『宗教が作る虹』（間瀬啓允訳、岩波書店、1997）第4章、また、その傾向を網羅的に言及し分析しているものとして小原克博の「現代神学における宗教的多元性—グローバル化する世俗化社会の行方」（『宗教研究』329号、2001年9月）を参照。
- (7) Hans Küng, *Das Christentum*, S. 233.
- (8) Ibid., SS. 229-238を参照。
- (9) John Hick, *The Metaphor of God Incarnation*, SCM Press, London, 1993, pp. 99-102.
- (10) Hans Küng, *Das Christentum*, B-II ; John Hick, *The Metaphor of God Incarnation*, Chapter 2を参照。
- (11) John Hick, *The Metaphor of God Incarnation*, pp. 80-88.

- (12) ニコス・カザンザキス（キム・ソンヨン訳）『성프란체스코』（聖フラシスコ）コリョウォン、1985年、4頁。この作品は、日本でも『アシジの貧者』（清水茂訳、みすず書房、1981年）という題で翻訳されている。しかし、日本語版には筆者が引用するカザンザキスの前書きがないため、ここでは韓国語版から引用する。
- (13) 蜂屋邦夫訳注『老子』岩波文庫、2008年、11-13頁。
- (14) 박영호（パク・ヨンホ）『다석사상으로부터 본 불교 : 반야심경』（多夕思想から見た仏教：般若心経）ドゥレ、2001年、123-128頁。
- (15) イザヤ書66：1、使徒言行録17：24-25、ヨハネによる福音書3：8、ルカによる福音書18:19を参照。
- (16) 滝沢克己「信仰の可能性について」（1935）、『瀧澤克己著作集』2、法蔵館、1975年、55-60頁所収；金珍熙『타키가와 카즈미 신학 연구 : 일본적 신학 형성의 단면』（滝沢克己神学研究：日本的な神学形成の一断面）モシヌンサラムドル社、2014年、第2章を参照。
- (17) 滝沢克己「バルト神学になお残るただ一つの疑問」、『瀧澤克己著作集』2、435-436頁所収；金珍熙『滝沢克己神学研究：日本的な神学形成の一断面』、第2章を参照。
- (18) 滝沢克己「信仰の可能性について」、『瀧澤克己著作集』2、55-60頁所収。
- (19) 滝沢克己「イエス・キリストのペルソナの統一について」、『瀧澤克己著作集』2、183頁所収。
- (20) 金珍熙『滝沢克己神学研究：日本的な神学形成の一断面』、第3章を参照。
- (21) 滝沢克己「イエス・キリストのペルソナの統一について」、『瀧澤克己著作集』2、197-199頁所収を参照。
- (22) 金珍熙『滝沢克己神学研究：日本的な神学形成の一断面』、第1章を参照。
- (23) 同上、第2章を参照。
- (24) 同上、227頁。
- (25) 滝沢克己「信仰の可能性について」（1935）、『瀧澤克己著作集』2、41-42頁所収。